

息抜き短編「ねこ目線で」

ざわ公

5月、ゴールデンウィークが終わった頃。

なんともいえない過ごしやすい陽気。

涼しげで、それでいて暖かい風が強くもなく、弱くもなく吹いている。

春、という一文字を体現するようなそのなだらかな空気の移動を、

僕は、少し長くなったヒゲで心地よく感じている。

1、2日前まではのんびりとテレビを見ていたり、昼寝したり読書をしたりして、普段は家にいない時間帯を過ごしていた家人たちが慌ただしく外に出ていったこの家で、僕は、忙しそうに洗濯物をたたんでいる母さんを寝っ転がって眺めていた。

「あんたは楽でいいねえ。」

ふと、母さんがつぶやいた。というよりは、僕に対して言ったんだろう。

でも、視線は洗濯物に合っていて、僕のことはみていない。

返事が返ってくるものだとは思っていないみたい。

そりゃそうか。僕は猫だからね。

「いつもお世話になってます」と、一声鳴いてみても、母さんはニコッと笑うだけで、やっぱりわかってないみたい。

いや、もしかしたらわかってるのかもなあ。

と、そこまで考えたところで、開けていた窓から蝶々がひらひらと迷い込んできた。

「ようこそ、我が家へ。」僕はまた、一言鳴いた。

母さんは気づいてないみたいで、洗濯物と戦っている。

ゴールデンウィークでのんびりしすぎたせいか、洗濯物はいつもの倍くらい。

「あら、ちょっと太ってきたかしら」と、ぼやいていたので、いい運動になるんじゃないかな。いや、ならないか。

蝶々はまたもひらひらと白い羽を見せつける様に僕の近くを飛び回ると、またゆっくりと家の外へ出ていった。

僕はそれを見届けると、春の心地よいひだまりの中で、ゆっくりと、目を閉じた。

「おやすみ。」

母さんが、きっと、そう言ったような気がした。